NEWSLETTER

三富新田巡検

名古屋大学 溝口常俊

香川大学の村山先生から、新学術関係の第1回アクションリサーチ研究会を11月27日(木)に埼玉県の三芳の「新田」で行なうとの案内があり、参加することにした。早朝名古屋を出て、品川、高田馬場経由で所沢に午前9時45分着。レンタカーで三富(さんとめ)新田に向った。案内役は東大林政学研究室の竹本太郎先生。学生指導で何度もこの地を訪れ、「林」のみならず農家での聞き取りも詳細になされているので、話をお聞きして武蔵野開発の現状を知ることができた。

私自身、畑作研究をしていながら、関東の畑作地に出かけたことがなく、今回がはじめての見間であった。関東の畑作地の中でも、武蔵野台地に開かれた短冊状の地割りの三富新田は有名で地理学の分野でも多くの研究がなされている。今回の巡検写真を披露する前に、菊地利夫『新田開発』古今書院、1977から、後進地の藩営新田として位置づけられた三富新田についての件を紹介しておきたい。

「1695(元禄8)年の川越藩の藩営開発である三富新田も短冊型の土地割を道路の両側にもつ路村をなした。三富新田は東西に走る中央道路の両側に1戸の土地割を間口40間・奥行375間・5町歩である。これを名主2戸分・新田百姓1戸分としている。こうして上富63戸・永久保21戸・中富40戸・下富49戸の新田百姓が入会権を持つ村々から移住している。幕府・川越藩によって計画されたこの路村と土地割は優れたものであるあることは、その後の武蔵野における畑作新田に模倣され、明治初期にこの村落形態をなす地方から両総台地の東京新田へ移住した人々によってもまたそこに同じ形態の路村が建設されている。」(p. 479)

この文章を再検討するところから新たな研究が始まると思うのだが、ここでは思いついた検討 課題のみ掲げておこう。

1) 三富といって、それが上富、中富、下富の3村を集合した総称とされていることがわかったが、そのまとまりとしての機能はあるのか。現在、上富は三芳町、中・下富は所沢市に所属し、分断されている。個々の村でも、地割をみると1つが5町歩と広い。その所有者は道路沿いに並

んでいるが、住民(所有者)間の連携はどれほどあるのであろうか。竹本氏の話によるとお互い、自らの土地管理などで精一杯で、他者との交流はあまりないとのことである。上記に「名主」とあるので、村のリーダーはいたはずで、かつ新田百姓(小作も含まれていたであろう)たちとの関係はどうであったか。年貢の支払い、村行事など、村運営の実態の変遷についても、新田村ではない一般村との比較をしつつ検討する必要があろう。

2) 「入会権を持つ村々から移住」とあるので、実際にどの村から移住してきたのかを明らかに

したい。そしてどこの村の誰が主導権を握ったのか。今回の見聞で、4つ菱の家紋が目に付いたので武田家ゆかりの誰かが名主となって活躍されたのであろう。

- 3) 「三富新田は東西に走る中央道路の両側に(短冊型の地割り)」とあるが、中富ではほぼそうであるが、上富では中央道路はほぼ南北に走り、両村の境界で、それぞれの村での地割が直行していた。下富ではその西部と東部で地割の方向が違っていた。三芳町教育委員会文化財保護課作成の「三富新田の開拓」パンフ掲載の地形図(図1)では、中富の中央道路が上富地区に続いているので、上富もその道路に沿って家屋を配置し、その背後に短冊形割地をすれば出来たはずなのに、そうはならなかった。その謎も解かねばなるまい。
- 4) この三富新田の路村がモデルとなってその 形態が他地域に伝わったとある。その詳細を検 討したいということに加えて、尾張の海岸部の 新田地帯でも短冊形の地割りはあるので、そこ でも路村が形成されたのか、さらに発展させて 全国の路村形成の比較研究も行なってみたい。



図 1 「三富新田の開拓」パンフレット掲載の地形図(三芳町教育委員会文化財保護課作成)



写真1 旧島田家

さて、図 1 中の矢印にそって車を走らせ、最初に訪れたのが上富の中央 〇印の「旧島田家住宅」である。文化・文政期(1804-29)の茅葺寄棟造りで、間取りは食違い

型四間取りで、三芳町指定文化財になっている(写真1)。中に入って囲炉裏にあたっていたら、近くの小学生が列を成して見学に入ってきた(写真2)。

武蔵野台地、水がない。だったら井戸でしょう(写真3)。水にまつわるいい話があったので、載せておく(写真4)。文字が判読しにくいかと思うので、書き出しておいた。



<三富新田と水>

写真3 井戸

水のない三富新田では、

開拓の当初、遠く多摩川から用水を開削 する計画がありました。しかし、いくつか

りる計画がありました。しかし、いくうか の困難が重なり、用水は完成せず、三富には水が流れ



写真4 三富新田と水、「カヤ湯」

てきませんでした。そこで、川越藩では開拓農民に資金を与え井戸を掘らせました。しかし、思ったようには水は出ず、深さ70尺(約21m)~90尺(約27m)という深さまで掘って、ようやく上富村に四カ所、中富村に四カ所、下富村に三カ所の合計十一の井戸に水が湧いたに過ぎませんでした。村人は共同で大切に井戸を利用しましたが、日照りの時などは井戸水は枯れてしまうこともしばしばあったようです。そうした日照りの時は約四kmも離れた柳瀬川まで水を汲みに行ったとのことです。

こうしたことから、三富新田の開拓者や開拓者の子孫たちは、いつも水を大切にしていたようです。例えば、いつも風呂に入れないのでやわらかいチガヤなどの草で体の汚れをふき取ったという「かや湯」の話などをはじめ、水を大切にした話がたくさん伝えられています。(平成20年3月 三芳町教育委員会)

<カヤ湯>

あるあつい夏の日のことでした。上富の多福寺の近くのあるお百姓の家に商人が立ち寄り、「少し休ませてくだされ」といいました。遠方から歩き続けてきたらしく、大変疲れた様子でのどもかわいているようでした。

お百姓は「何もできねえがさあどうぞ」と家の中に入れ、「まあ水でもいっぱいあがれ」といって、とても冷たい水を持ってきました。商人は「これはありがたい。何よりのごちそうじゃ」と押しいただくようにして水を飲みました。「甘露、甘露」

水を飲み終えた商人がふと奥のほうを見ると、カヤがたくさん積んであるあるところで、 裸になったお百姓が、カヤで身体をふいているところでした。

「何をしているのですか」とたずねると、お百姓は笑いながら「朝はカヤ湯といって、ここらは台地で水が昔から少ないので、こうやってカヤで汗をふき、あかを落とすんです」といいました。

お百姓が商人に出した水は大事にしておいた水だったのです。商人は、ただもう頭の下がる思いでいっぱいでした。

旧島田家見学の後、本日のメインコース、縦長の地割り歩きを行なった。「三富新田の開拓」 (三芳町教育委員会文化財保護課)によると1軒分の屋敷割りは図1のようである。

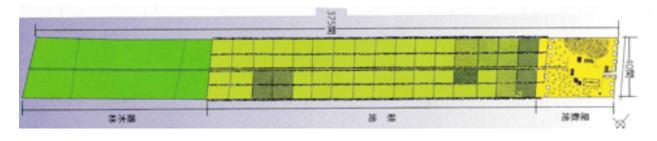


図1:1軒分の屋敷と地割図

「三富の開拓は幅六間の道を縦横に開くことから始められ、この道の両側を間口40間(約72m)、奥行375間(約675m)の短冊状に区画し、一戸あたり五町歩(約5ha)ずつ配分しました。下記の1軒分の屋敷割(上富の例)からもわかるように、通路に面した表側を屋敷地として、その次に耕地を、いちばん後方を雑木林としました」



写真5:屋敷地からヤマを見る

上富小学校(図1では屋敷地の部分)を出発点として歩き出した。地割の先にある雑木林(写真5)がゴールなのだが、歩けども歩けども、なかなかたどり着けない。目指す雑木林なのだが、ここ地元では「ヤマ」と呼ばれている。武蔵野台地の大平原に山など1つもない。小山さえない。それなのに「ヤ

マ」があるとは! 地形学上で区分された山岳ではなく、住民にとって認識される「ヤマ」こそ重要で、そうした「ヤマ」を探したいと、わが「地域環境史」構想で述べ、その一事例として愛知県の伊勢湾に面するゼローメートル地帯の飛島村での高まり(飛島山)を紹介したばかりだが、その第2事例として三富新田の雑木林を加えておくことにする。小学校のフェンスにあった説明版「三富の開拓と屋敷地」に記された雑木林(ヤマ)の解説を載せておこう。

「薪や堆肥となる落ち葉の供給源や防風林として農家が代々育成してきた山林です。冬には下草を刈り、落ち葉を掃き集めます。落ち葉はサツマイモの苗床としても利用されます。また「雑木」とは役に立たない木を指すため、雑木林のことは「ヤマ」と呼び慣れ親しんでいます」

雑木が役に立たない木を指すとは、雑木が可哀想だが、「ヤマ」と呼ばれて親しまれていたの だから、まあ許してあげよう。



写真6 ヤマに近づく

さて、4等分された耕地の境には茶ノ木が植えられていた。これは耕作土が風で吹き飛ばされないようにするためだという。本日、快晴で風もなく、散歩日和であったが、普通は空っ風が強く土が舞うらしい。村山さん提供の明治15年(1882)編纂『武蔵国郡村誌』第四巻所収の「上富村」によると、同村の「地味」

は「色赤黒質悪菽麦に適せず茶甘藷に適す」とある。130年も前と同じく茶と甘藷が今も三富新田を守っている。畑はサツマイモの収穫が終わったところで、ニンジンが多く、サトイモも作られていた。社会見学の小学生達は足が速く、ヤマに入る前に追い越されてしまった(写真6)。

そしてヤマに入ったら一面のクヌギとコナラの林であった(写真7)。竹本さんに丸いどんぐりがクヌギ、楕円どんぐりがコナラとのご教示を得た(写真8)。現在、この木々も薪用に使われるわけでもなく、伐採された気配もなく、下草も生え放題であった。ただ堆肥用の落ち葉だけの森になっていた。

写真7 ヤマ(雑木林)の中





写真8 クヌギ(左)とコナラ(右)の葉とどんぐり



写真9 ヤマの中の塀囲い

さて、一大事。ヤマの中で妙な一画に目がいってしまった。フェンスで囲われた空間で、中で何がなされているかわからない(写真9)。どうもこの部分が他者に売却されたようで、廃棄物置き場になっているのではという話だ。後ほど下富のヤマの中に迷い

込んだときも、もっと高いフェンス囲いが散見された。ヤマではない耕地の一角も随所で売却さ

れ虫食い状況になりつつある(写真10)。これは主として農業後継者がいないのと、相続の際の高額税金によるという。こうした状況が続けば、三富新田の歴史ある地割り風景が消えてしまうのではと危惧される。



写真10 三富新田の耕地が大倉庫に

上富小学校の屋上からの三富新田割地風景写真を載せておこう(写真11-1/2)。左端に既に大倉庫が進出してきているが、まだ割地健在である。この風景が末永く残されていくことを祈る。



写真11-1/2 上富小学校屋上からの三富新田割地の風景



追補1:三富新田の生みの親 柳沢吉保

「生類憐れみの令」など元禄期の悪政に関与した幕臣として、一般には評判のよくな い柳沢吉保であるが、ここ三芳の地では三富新田開発を推進した大恩人として愛着を もって語られている。「三富新田の開拓」(三芳町教育委員会文化財保護課)により、 柳沢吉保を解説しておこう。

甲斐源氏源義光のながれをくむ柳沢家は、巨摩郡武川村一帯に勢力をもった武士団で あり、武田家滅亡後は徳川家に仕えました。

柳沢吉保は万治元年(1658)、江戸市ヶ谷で生まれ、父安忠についで館林藩主徳川綱吉 に仕えました。幼い頃から学問を好み、武芸の修行に励んだといわれています。元禄元 年(1688)には、1万石の加増を受けて五代将軍綱吉の側用人となり、将軍側近として幕 府政治を掌ります。同7年、武蔵国川越藩の藩主を命ぜられて、72300石を賜りました。

川越藩主となった後は、民政に意を注ぎ、着任後わずか半年後に三富新田の開発に着 手するなど大きな業績を残しました。宝永元年(1704)には、甲府藩15万石の藩主に取り 立てられ、そこでの政策は川越藩政を上回る実績を残したといわれています。しかし、 宝永六年に綱吉が死去すると、吉保も引退し長子吉里に家督を譲り、その5年後の正徳四 年(1714)駒込六義園にて57歳の生涯を終え、甲州永慶寺に葬られました。その後享保九 年(1724)に柳沢家が大和郡山に国替えの折、恵林寺の信玄霊城の隣に改装されました。



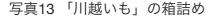
写真12 OIMO café

昼(11/27)は上富中央道路56号線交差点にある「おいもカフェ」に 出かけた。昼食時を避けて1時過ぎに入ったのだが、1時間待ち。 若いカップル、女性に人気の店で、平日とはいえ超満員。お芋で店 おこしが成功したのだから「明るい未来の三富新田」の数少ない

のんびり巡検、腹

を立ててもしょう

がない。待ち時間のあいだ、店の周りを散策す ることにした。そこで引込まれた風景が3つ。 ①川越いも、②シラカシの防風林、③お墓。





道路沿いの農家はサツマイモの収穫で忙しく、「川越いも」のブランド名で出荷の最中であっ た。写真12はOIMO caféの武田さん宅の生産直売の看板。写真13は旧島田家の向いのお宅での

「川越いも」パックと車に積まれたとれたてのサツマイモ。収穫は8月末からで11月末の今は最終期とのこと。

「三富新田の開拓」(三芳町教育委員会文化財保護課)によると、寛延4年(1751)上総国志井津村(現千葉県市原市)から南永井村(現所沢市)にさつまいもの種芋がもたらされると、三富地域でもさかんに生産されるようになり、文化年間(1804~17)には「富のいも」(三富新田でとれたさつまいも)の美味しさが評判になったという。その後生産の拡大とともに川越の市場で売

買されるようになり「川越いも」というブランド名になった。ランチで食したおいもが入ったカレー・おいもサラダ・おいもアイスクリームは、軽めでまるやかで女性客好みの味がした。

おいもカフェの裏にでたら、巨大な壁となったシラカシの防風 林が聳えていた。林学専門の竹本先生でもこんな高い生垣は見た ことがない、と驚かれていた(写真14)。高すぎて頭の散髪が出 来なかったみたいだ。



写真14 シラカシの防風林



写真15 武田家墓地(おいもカフェのお宅)



写真16 武田家墓誌

このシラカシ防風林沿いの道を抜けると畑の中の「お墓」が目に入り、近づいてみると四菱家紋の武田家之墓であった(写真15)。その墓地の一角に立派な「墓誌」があり、「武田家先祖代々有縁無縁一切之精霊」表記に続いて、天明3年に本家の兵右衛門から現在の先代(七代、誠一)まで16名の名が刻まれている(写真16)。旦那寺(おそらく多福寺)の過去帳から武田家の死亡者名を拾い出し作成されたのであるう。江戸時代の過去帳で死亡年が記されているのはごくまれなので、この墓誌記載はきわめて貴重な情報といえる。この死亡年を見て、驚きというか不思議なのは、16名の平均死亡年齢が78.4歳と極めて高いことである。80歳以上が10人もいた。天保13年の初代から戦前の五代まで、2人づつ夫婦名(おそらく)が記されているので、その死亡

年を比較すると、4代までがいずれも夫が長生きしている。5代も夫82歳、妻83歳で、夫の長生きは変わらない。男女別に平均を出すと夫86.8歳、妻75.8歳となり、夫が11歳も長生きしている。

「有縁無縁一切之精霊」と書かれているので、武田家の家族すべてが記されていると思ったのだが、15歳以下の童子・童女が1人もいないし、同居していたであろう兄弟姉妹他も記されていないので、この墓誌では家主夫妻のみが刻まれたものと思われる。それにしても長生き家系の武田家であった。サツマイモの栄養が良かったのであろう。

この武田家のお墓を見る1時間前に、上富小学校から割地風景を眺めていたときに、各割地ごとにお墓があることに気がついた(写真17)。ここでは、上富小学校横で最初に目にした中嶋家の墓誌の全容を載せておこう(表 1)。



写真17 上富小学校屋上から見た各家割地ごとの墓地

基本的に、夫婦とその子ども単位で記されており(10代以降は違うが)、死亡年順ではない。 武田家と違って子供も記されているので、貴重な記録である。3代から6代までいずれも子供を亡 くしている。中でも4代宇左衛門家族の悲劇は目を覆う。寛延3年(1750)の同じ年の同じ月(6 月)に夫婦と男児2人が亡くなっている。おそらく流行り病であろう。12代太朗の後妻は3人の 子供をいずれも1歳のときに亡くしている。悲劇であるが、本人の名前がないのも悲劇である。 太郎には先妻、後妻、そして妻と3人の奥さんが出てくる。謎多き家族であるが、詮索しないこ とにしよう。

表1 中嶋家の墓誌

おそらく三富新田には割地の数だけ墓誌があろう。みたところ多福寺の墓地にも数十軒の墓誌がある。これらを集めれば、家族単位の情報収集となるので、過去帳以上の分析が出来そうだが、個人情報がわかりすぎてしまうので、取り扱い注意で、控えめに対処することにしよう。

天明5年は飢饉の年(4年がピーク)だ。中嶋家でも3人がなくなっている。三富新田にも飢饉が押し寄せたのであろうか。当初からの研究目的である、飢饉、疫病、戦争、自然災害などと死者数の関係については調べてみたい。

今回の巡検、竹本さんの説 明で林に目がいくようになっ たのがおおきな収穫であっ た。見事な紅葉の写真で締めく くっておきたい。

| 中嶋家の | | 40 | for- | W 07 | | A |
|------|------------|-------------------|------|------|-------|-----|
| 位号 | 名前 | 代 | 和暦 | 西暦 | 月日 | 年齡 |
| 禅定門 | 只左衛門 | 中嶋先祖 | 元禄12 | | 11.21 | |
| 禅定尼 | 只左衛門妻 | | 宝永5 | 1708 | | - |
| 禅定門 | 太左衛門 | 2ft | 正徳3 | 1713 | | - |
| 禅定尼 | 太左衛門妻 | | 正徳4 | | 10.03 | |
| 禅定門 | 太左衛門 | 3ft | 享保5 | 1720 | | - |
| 禅定尼 | 太左衛門妻 | | 天明1 | 1781 | | |
| 童女 | | - | 享保5 | 1720 | | |
| 童子 | | | 享保9 | 1724 | | |
| 禅定門 | 宇左律門 | 4代 | 實延3 | 1750 | | |
| 禅定尼 | 宇左衛門妻 | | 寛延3 | 1750 | | |
| 童子 | | | 實延3 | 1750 | | |
| 童子 | | | 寛延3 | 1750 | | |
| 童女 | | | 宝暦3 | 1753 | | |
| 童子 | | | 安永5 | 1776 | 5.25 | |
| 禅定尼 | | | 明和3 | 1786 | | |
| 禅定門 | 太左衛門 | 5代 | 天明5 | 1785 | 10.15 | |
| 禅定尼 | 太左衛門妻 | | 天保1 | 1830 | | |
| 禅定門 | | | 天明5 | 1785 | 10.15 | |
| 童子 | | | 天明5 | 1785 | 10.18 | |
| 禅定門 | 宇左衛門 | 6代 | 文化8 | 1811 | 8.06 | |
| 禅定尼 | 宇左衛門妻 | | 天保2 | 1831 | 10.03 | |
| 童子 | | | 文化4 | 1807 | 1.18 | |
| 童女 | | | 文化8 | 1811 | 2.04 | |
| 禅定門 | 宇左衛門長男長左衛門 | 7代 | 明治7 | 1874 | 2.18 | 78才 |
| 禅定門 | 宇左衛門二男市右衛門 | 8 代 | 天保3 | 1832 | 0.22 | |
| 禅定尼 | 市右衛門妻 | | 嘉永6 | 1853 | 4.14 | |
| 禅定門 | 栄蔵 | 9 / t | 明治9 | 1878 | 5.04 | 50 |
| 禅定尼 | 栄蔵妻タキ | | 明治34 | 1901 | 7.1 | 72 |
| 禅定門 | 三代吉 | 10代 | 昭和12 | 1937 | 3.22 | 87 |
| 禅定尼 | 三代吉妻ヤス | | 明治24 | 1891 | 4.20 | 41 |
| 童子 | 宇吉長男代三 | | 明治27 | 1894 | 2.15 | 1 |
| 禅定門 | 三代吉三男和市 | | 明治37 | 1904 | | 25 |
| 禅定門 | 三代吉四男伴次 | | 大正10 | 1821 | 12.03 | 41 |
| 禅定尼 | 宇吉五女テル | | 大正10 | | 10.26 | 16 |
| 禅定尼 | 太朗先妻キヨ | | 昭和16 | 1941 | 7.18 | 30 |
| 嬰女 | 太朗後妻長女 | | 昭和18 | 1943 | 1.01 | 1 |
| 児子 | 太朗後妻長男伸一 | | 昭和20 | 1945 | | 1 |
| 孩子 | 太朗後妻二女秋江 | | 昭和27 | 1952 | | 1 |
| 居士 | 宇吉 | 11代 | 昭和32 | 1957 | | 86 |
| 信女 | 宇吉妻せん | | 昭和27 | 1952 | | 83 |
| 居士 | 太朗 | 12 / t | 昭和58 | 1983 | | 73 |
| 大姉 | 太朗妻マサ | | 平成22 | 2010 | | 89 |

上富の北部の木ノ宮地区に多福寺があり、その南西の村境を中富に入ったところに神明社・多聞院がある。いずれも赤く染まっていた。まずは多福寺の落ち葉の駐車場(写真18)、これがクマザサ(写真19)、これがこのあたりで一番多いアズマネザサ(写真20)、そしてここに紫式部か(写真21)。やはり気になるお墓(写真22)。家畜の供養碑もありました(写真23)。なぜか寅人形、「身がわり寅納め処:毘沙門さまの化身である寅に災いを託して納めます」とのこと(写真24)。奥多摩新四国八十八ケ霊場でもあった(写真25)。いずこも紅葉、紅葉で美しかった(写真26)。



写真18 多福寺駐車場



写真19 クマザサ



写真20 アズマザサ



写真21 紫式部の実



写真22 多福寺墓地

写真23 畜霊供養碑

写真24 毘沙門天身代わりの寅

写真25 奥多摩新四国八十八ケ霊場

写真26 紅葉

追補2:三富の寺 多福寺

「三富新田の開拓」パンフ(三芳町教育委員会文化財保護課)に「三富の寺 多福寺」 の説明があったので、載せておく。

元禄九年八月、吉保は開拓農民の心のよりどころとして、上富村に臨済宗三富山多福 寺、中富村に祈願所として毘沙門社(別当寺多聞院)を建立しました。出身地の異なる 者たちが寄り集まってくる新田村落での生活のため、寺社の建立によってなおさら村民 としての一体的まとまり、連帯感情を作り出していくことが必要だったようです。

三富新田に入村した農民たちは、この時まで上富村は亀久保村(現ふじみ野市)地蔵院、中富村・下富村は大塚村(現川越市)西福寺を菩提寺としていましたが、多福寺の建立によって三村とも多福寺を菩提寺としました。以来多福寺は、三富農民の精神的支柱として大きな役割を果たしていきました。

吉保の著した「常応録」をはじめ多くの什宝を所蔵する多福寺は、今日も開発当時の 面影を残し、訪れる人々の心にやすらぎを与えてくれます。